

さみしい夜の句会報 第81号 (2022. 9. 4-2022. 9. 11)

- ◆ 参加者空瓶、月硝子、しまねこくん、さー、白水ま衣、太代祐一、Ryu\_sen、ほこぼ、風池陽一、syusyu、Tomoko、汐草葉月、水の眠り、菊池洋勝、西脇祥貴、なゆた、おたま、宮坂菱哲、おかもとかも、最中妙、石川聡、花野玖、しろとも、雲上晴也、天やん、海馬、あまつりへきん、生・存、ちゆんすけ、岡村知昭、mawort、蔭一郎、コネコノピッチ、さぶさち、ともなう、電車侍、森内詩紋、式定住佳、桔梗臺、伽羅、しもじょう、星野響、najiiri、高田月光、一休庵、へ、Tomo、ソウシ、そよ花、斌、鴨川なぎ、さっし(砂狐)、抹茶金魚、雷(らじ)、夜間戦闘(れん)、涼閑、hyutoppa、突破、小沢史、目下呉、目下踏子、阿笠香奈、目悠輔、HAKIBIKI、せば、石原とつき、山田小太郎、いずみ、東(こころ)、ゆりのはなこ、西沢葉火、鷺沼くぬぎ、古都梨衣子、池田吉記輝、木野清瀬、日月星香、あお、落合魯忠、我矢一(aya)、睦月ヨシ、輪井ゆう、kiyoka、陽菜のよた、たろりずむ、Ella、白猫、津島野イリス、6 Rose!、業、檜崎進弘、ファイファイ、名大ぼち、川合大祐、月波与生(九四名)

◆ 7・7詩、5・7・5詩

へアサロン帰りの猫とすれ違う 空瓶  
どうしても踊つてしまふサバサンド Ryu\_sen  
とんぼ坂の“ちちんぷいぷい”の誘惑 石原とつき  
嘘ついていちばんかたいグミになる 小沢史  
電線のなかを通つて着く野原 蔭一郎  
きみにだけ点呼をとつてみる真昼 蔭一郎  
速乾性涙(過剰かもしれないが) おかもとかも  
野葡萄や蔓に流るるイエスの血 菊池洋勝  
戒名を少し文字つて島流し さっし

カルビー食べて森永食べて明治食べて資生堂。パーラー 斌

歳時記がなくて名前のない今夜 ソウシ

暗がりとして歩く蟹二、三匹 太代祐一

雄の梨違ふ籠には雌の梨 しまねこくん

梨代の代わりに置いて来る次男 しまねこくん

サキユバスの夢の快感秋涼し 菊池洋勝

まつり縫い大きなことを言う前に 西脇祥貴

毛の生えた抽斗 鶏とする 西脇祥貴

十五夜は奥歯が痛む河馬の群れ 蔭一郎

週休が七日で重陽の手相 蔭一郎

鳴き声で洗濯ばさみだとわかる 岡村知昭

わたくしが軋むメレンゲにはなれぬ ちゆんすけ

夏空に六番ショート西の雨 まつりぺきん

クレーム ウインナーのタコだわ さつき まつりぺきん

台風の中でも賢くなれますか まつりぺきん

実際お札とか家来とかどうよ まつりぺきん

人の世やスロットマシンの壊れかた 海馬

演算についていけない川下り おかもとかも

朝刊のビニル袋へ白露かな 菊池洋勝

ぜんしんにあなあいておともれている 太代祐一

藪枯らしすっからかんは光なり 日下踏子

電線に小松政夫が泊まってた 石川聡

マンドリン月食いながら揺れ続け 石川聡

迷路からポロリと落ちて嘘になる 石川聡

アンメルツつるつるの肩に受験生 Tomo

断薬を諦め眠る虫の闇 Tomo

十六夜を溶く薄墨で詠む挽歌 月硝子

目の裏に月を隠して寝る五歳 さー

売れている方の心が寿司を撮る 白水ま衣

飲み会は雨天決行名月や 風池陽一

十六夜や時代が一つ消え去りぬ *syusyu*

中秋の名月 天に冴え冴えと *Tomoko*

かくや姫 月面地図描く 月見かな 汐音葉月

聡明な月は一面だけ見せて 水の眠り

断末魔菊人形の首落とす 宮坂変哲

情熱を映して白き月昇る 花野玖

良夜には詩一篇と冷やの酒 雲上晴也

紫煙たつ辞表の帰りの名月や 天やん

秋を媒介している赤とんぼ あ

望月を鏡としては叩き割る 生・存

名月やおぼろに矢庭魄あらわ *hugwort*

眠らない猫たち不安という贈りもの コネコノビツチ

月だけに満ちてひとりぼっち しるとも

雲流る 彼方になびく 稲穂かな 電車侍

追いかける自分の背中追う自分 弋定住佳

庭の菊花の手入れは九月だけ 黎明

待宵や香焚きしめる紅をさす 伽羅

幽霊がもつちり肌でクリケツト しもじょう

月草へ吸い寄せられる漸近線 星野響

鷹作の夜を紋切りして遊ぶ *ra.jini* 高田月光

南瓜って呼ばれたこともない彼女

シリンジとコットンロープ菊の酒 あ

街灯の下私は私の影に立つ べ

夜の静寂にレコード針を落とす そよ花

赤橙の光に抱かれ君は消ゆ 鴨川ねぎ

家具が不在に垂らす尻尾 抹茶金魚

号泣した映画があると思ひ込んでいた 雷

神隠し隠した神を問い詰める 涼閑

夜に触れし校舎は夢の中白露 *hyutoppa* 突破

ちらほらと朝日に桜が咲いている 流天

白露の露払いは私の務め爪先の冷たさ 日下 昊

こころの図書館で居眠り そよ花

桃の缶ずめと粘り勝つ子供等 桔梗菫

バファリンの優しさだけが欲しい夜 阿笠香奈

コモンズが燃える遠くに鳥が飛ぶ 且悠輔

何となく って言うやつは 不確実 HAKUBIKI

美しきかな羽付けておる餃子 せば

ねるねるねるねを寝ながら練るね 山田小太郎

傷痕をなぞれば父母ヶ浜日暮れ いずみ

顔以外好きになれずに捨てていく 東こころ

りんご嚙むふるさと訛り取れなくて ゆりのはなこ

瓶詰めofジャムに置き去りの小指 西沢葉火

眼裏に表情筋の解剖図 西沢葉火

好きだよと言えないままで吸うタバコ 古都 梨衣子

色鳥や父は祖父母に愛されず 木野清瀬

選んだ言葉で盆荒れ案じる 日月星香

ただいまと小声ため息部屋独り 我矢 GAYA

足跡を確かめたくて本に問う 睦月ヨシ

積み上がる雲の圧力を抜く雨 輪井ゆう

掻き乱された後のこころ KIYOKA

埼玉に作る千葉デイズニerland たろりずむ

心ごとスモーキーブルーに染まる秋 Hina

野葡萄の数珠 吾は輪廻を救え 白猫

黒猫が目に飼つてゐる銀の蛇 ぽっぼ

シーフードヌードルはまだ海を知らない 月波与生

◆ 7・7、5・7・5以外の短詩

さよならが「う」を除外した原因をわたし以外はみんな知

つた 蔭一郎

いいこだねと言はれ続けて野良猫の眉間の傷は少しずつ癒

ゆ ぽっぼ

染みを焼くたび指先に傷増えてわたしは染みに祝はれてゐる ぼっぼ

眠れない夜は新聞配達のバイクの音にさえ慄いてな ゆた

秋の夜空 白く輝く円い窓 この世界からの 出口のよう な 最中妙

千切りのリズムで今日を熟(こ)なせばたらふく食べても腹はくちない しろとも

しなやかに湾曲する猫に触れ死ぬわけないさとハチワレを 嗅ぐ さぶきち

萎るるを肯(か)ぶごとく 貴船菊 露の世をゆく我もまた露 森内詩紋

月に行き連絡とれない宇宙飛行士「ああすいません 眠ってました」 夜間戦闘(れん)

窓開けて雨音を聞く秋の宵治りかけてる火傷が痒い 鷺沼くぬぎ

持ってきた全てに花丸つけてやる文字もぬり絵もこの鼻糞も あお

貴方の顔は 忘れても 忘れられない 煙草の香 陽菜ひよ子

◆ 詩

こつちわくもつて月がみえなかつた  
心にもずつともやがかかっているよう  
いちねんで

「一番綺麗な月でさえ  
くもりガラスの

奥みえない (おたま)

BluetoothをTOKYOタワーがジャックした  
同じあやまちをしては駄目だと囁いた  
ボクはもう後戻りはしない  
さみしいふりはやめなさい  
君ほど生命力の強さと守られて居る人を  
ボクは知らないよ  
どうやら道は分かれたようだね (ともなう)

人と人簡単の様で難しい。  
家族でも。

友達でも。  
夫婦でも。

リアルでもSNSでも。

無理せんといこー!

無理したらぶつ壊れるから。

離れたった人がおるなら、それまでの関係

自分に優しく

大丈夫、きつと味方は必ずおるから。(一休庵)

#### ◆作品評から

忍ばせた胸ポケットのバカヤロー 鷺沼くぬぎ

く川柳に「バカヤロー」が入ると何故が(憎めない)を  
前に付けて読んでしまう。掲句も胸ポケットに忍ばせるの  
だからまんざらでもないのかもしれない。(月波与生)

黒猫が目に飼つてゐる銀の蛇 ぼっぼ

くこんには。詠まれてゐる景がとても素敵なのですが、  
助詞「が」、語順、少し散文的な気もします

「目」という語には「眼」「瞳」「眸」など類語がたくさん  
ありますから、表現したいことに最も合っている語を検討

されるのもひとつの手、かと。(津島野イリス)

朝刊のビニル袋へ白露かな 菊池洋勝

〜夏から段々冷えて来る秋の体感。(月波与生)

夏空に六番シヨート西の雨 まつりべきん

〜六番シヨートがいいですね。読み手にとって思い出の六番シヨートが立ち上がります。(月波与生)

脅迫の材料としてのティンパニ 太代祐一

〜ティンパニはプロダクトではなくパーツなのだ。他のパーツはあなたかも知れないし隣の犬かも知れない。世界はパーツで出来ている。(月波与生)

深夜二時まだ見たくないメールあり 空瓶

〜時間を句に入れる場合その時間が妥当かという問題がある。といっても個人的認知もあるので絶対はないしすべての時間は句では「動く言葉」になる。その場合時間以外の言葉がどれだけ魅力的であるかが生命線となる。(月波与生)

十六夜や時代が一つ消え去りぬ syusyu

〜追悼 エリザベス女王 (6 Roku-)

週休が七日で重陽の手相 蔭一郎

〜「週休が七日」と「重陽の手相」の連絡がうまくいつてるか。さらに「週休」「七日」「重陽」「手相」と分けたとき各言葉でひとつの世界が構築されているかどうか。(月波与生)

カルビー食べて森永食べて明治食べて資生堂。パーラー 斌  
　　〜カルビー、森永、明治までは楽しい日常んだけど、  
最後の資生堂。パーラーで一気に高級感のある非日常へ飛ぶ  
（石川聡）

電線に小松政夫が泊まった 石川聡

　　〜電線、小松政夫はわかりますが、『泊』まった」と  
　　きますか：勉強になりました！（まつりぺきん）

野葡萄や蔓に流るるイエスの血 菊池洋勝

　　〜野葡萄の色が様々であるように、イエスの癒しの力も  
　　様々に現れる。ワインはイエス・キリストの血の象徴。  
　　掲句はワインになる前の、更に葡萄として実る前の、蔓  
　　のなかの養分に既にイエスの力が流れていることを詠ん  
　　でいる。根元的な把握に説得力を感じる句。（石川聡）

クレーム ウインナーのタコだわ さつき まつりぺきん  
　　〜「さつき」終わり方が散文的です。ウインナーのタコ  
　　とクレームとの繋がりも機能してないように感じます。

（月波与生）

わたしは終わりがたが散文的でもまったくかまわないと思  
　　うんです。作者にはなんらかの思いがあると思うのです  
　　が、表現的に確かにもやもやします。カタカナとひらが  
　　なだけで構成されているのは、見た目カッコいいです。  
短詩って、デザインも重要だと思つので。（蔭一郎）

女子だけのドッチボールは芋嵐 さー

　　〜男子が混ざると女子だけのドッチボールは緊張感が  
　　違うらしい。助詞「は」が効果的か考える。（月波与生）



聡明な月は一面だけ見せて 水の眠り

〜永遠に暴かぬ横顔秘めて（業）

毛の生えた抽斗 鶏とする 西脇祥貴

〜抽斗に毛が生えているだけでもじゆうぶん異常事態だ  
けど、この句はそれを鶏として認識・宣言する。朝にな  
ったら鳴いたりするのかな。抽斗としての機能を保ちつ  
つ鶏の振る舞いをするそれは奇異というより自然にすん  
なりと受け入れられている。二重に不可思議を抱えてい  
るようだ。（太代祐一）

〜『毛の生えた拳銃』を思い出した。（麿赤兎が良かった）

（榎崎進弘）

瓶詰めジャムに置き去りの小指 西沢葉火

〜ジャム瓶のなかに半透明の美しい小指が漬かっている。  
そんなシュールな読みが好きです。が、ひとりぐらしのひ  
とがちよっとペクチン少なめの硬いところみのジャムをひ  
と掬いた跡が綺麗にのこっている。というような読み  
もよいかなと。林檎ジャムの黄色がいいかな♪（石川  
聡）

眼裏に表情筋の解剖図 西沢葉火

〜眼裏つてあるのに、解剖図まできて、下の瞼まわりの  
筋肉がピクピク痙攣してしまった読後感。眼裏だと、故  
郷、おつかさん、なんかが類想沼で付く感印象だが表情  
筋で二段ロケット、解剖図で二段ロケットの飛躍が流  
石！（石川聡）

台風の目でも賢くなれますか まつりぺきん

〜まったくわけのわからない、わたしの読みですが、台  
風の目を自分の顔の目のどちらかに移植するのではない  
かと考えた。その台風の目は衰えることなく、ずっとわ

たしたちは台風の目に見られ続けるのだ。(蔭一郎)

迷路からポロリと落ちて嘘になる 石川聡

「迷路」と「嘘」がすこし付いてしまった感。「嘘」ではなく「瀧」とか、

デタラメなものを置くと面白そうですが、お題が「嘘」だし、石川さんが「嘘」に重きを置いている場合はこのままでも。変えるとしたら「迷路」のほうかな？(蔭一郎)

終電の窓が日めくりカレンダー まつりぺきん

「終電に映るのは街の灯りと疲れ果てた自分の顔。24時ちようど、先頭車両から物凄い勢いで曜日が変わっていく。(月波与生)

さよならが「う」を除外した原因をわたし以外はみんな知

ってた 蔭一郎

「わああああ、すてきだ…！ (古都 梨衣子)

断薬を諦め眠る虫の闇 Tomo

「え。なんだかすこく怖い。なんでだろ(ファイファイ)

野葡萄乃1つは白にする規則 しまねこくん

「野葡萄の、あるいは野ぶどうの、でいいと思うが「乃」には作者が拘りたい意味があるのだろう。同様に「つ↓ひ」とつ。提出の仕方を読み手は考える。(月波与生)

梨代の代わりに置いて来る次男 しまねこくん

「に、兄ちゃん・・・ (名犬ぼち)

実際お札とか家来とかどうよ まつりぺきん

「「実際お札」って言う超現実的な「お札」として読み

ました。ドラえもんの道具みたいなの？ でもどんなお札なのかわからずに「どうよ？」って訊かれると、自分がいま立っている地点がどのあたりか分からなくなって、ちよつと眩暈が来ました。だから「家」に「来」るのか。妄想譚み失礼。（川合大祐）

染みを焼くたび指先に傷増えてわたしは染みに祝はれてゐる ぽっぽ

〜ぽっぽさんこんにちは。

染みに祝はれてゐるといふ明るい歌の着地が素敵だなと思いました。指先が増える傷が、戦った証のような勲章のようにも思えました。短歌外から失礼致しました。（Tom）

そういうことは分母に言ってくれないか 白水ま衣

〜面白い。自分も分母のひとつであることを忘れて

鈍感さ。どこにでもいるあなたに似た人。（月波与生）